

アルテアの魔女 5

スピンオフ  
紅の鬼神

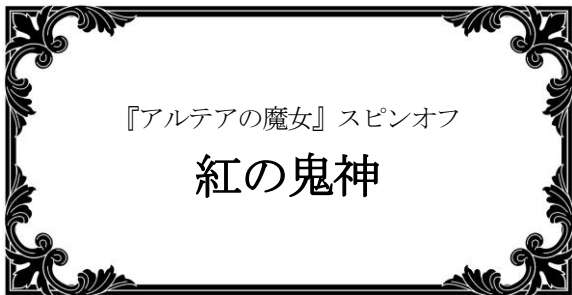
続編第一部  
死神の継承者と西方からの訪問者

---

たつみ暁

『アルテアの魔女』スピンオフ

# 紅の鬼神



Sale

## 1 ある夜の事

それは、ある晩唐突にだった。

「お義父様の事を教えてくださいませんか」

「あん？」

枕に頭を並べてすやすや寢息をたてる双子にそつと毛布をかけてやりながら、エレがそう言い出したので、ソファに座って明日の会議についての書類と睨み合っていたインシオンは、眉間に皺を寄せて顔を上げ、妻を振り返った。

父親について話す事など無い。双子の王族は不吉だという迷信に惑わされ、己に似ていない容姿だからというだけで自分を捨てて兄を選んだ。そして大勢の人を振り回した挙句、人間として超えてはならない一線を踏み超える大罪を犯したのを、この手で討った。思い出すだけでも胸が悪くなる。

夫の不機嫌を感じ取ったのだろう。「あ、すみません」エレが慌てながら首と両手を横に振り弁明した。

「あなたを育てた方の事です」

彼女の説明をよくよく聞くと、こういう事だった。

三歳に近づいた双子が、同じ年頃の子供達と遊び回って話をしてる内に、友達には「パパ」と「ママ」以外に、「じいじ」と「ばあば」という家族の存在が大抵いるものだと思った。

そして、

『エレとインシオンにはじーじとばーばいないの？』

『じーじとばーばのはなしきかせて！』

と、赤の瞳と翠の瞳をきらつきらに輝かせながら、二人してエレに詰め寄ってきたのだという。

しかし、幼い頃に生まれ故郷を失ったエレに、語れるほど両親の記憶は無い。インシオンも、実の父親に見捨てられ、母親とは一度も言葉を交わす機会が無かった。そうなる唯一話せるのは、インシオンの養父についてだけになったのだ。

「お父様である事に変わりはありませんし、あなたに関係がある方の話ならば、特にミライが喜ぶでしょうし」

娘のミライは大変な父親っ子である。弟のカナタが母エレにべったりなのは対照的に、インシオンが家にいれば膝の上に乗って甘えたい放題。彼が任務で数日家を空ける時には、まるで昔のエレのようにしょんぼりして目に涙をためながら、『……いってらっしゃい』とうつぶきがちに小さく手を振る。

『ミライはインシオンとけっこんすーの!』

姉が高らかに宣言すれば、

『じゃあカナはエレおよめちゃんにすうー!』

対抗するように弟も意気揚々と叫ぶのだ。

両親を「パパ」「ママ」でなく名前で呼び捨てする事について、エレは容認しているのだが、インシオンは「何か気に食わん」と矯正しようとした。しかし、周囲の誰もがエレとインシオンを名前で呼ぶし、ある意味同一人物である大きいミライとカナタも二人を父母と呼ぶ事が無いのを、子供なりに何か共鳴でもしているのか、子供達が呼び方を改める事は無かった。

『もう少し大きくなったら、自然と身に付く可能性もありますから』

エレの弟のヒカまでもが、まだ喃語しか発しないよちよち歩きの我が子を抱き上げながら苦笑して論したので、「時間の経過を待つ」という妥協案を受け入れるしか無かったのだ。

そういえば自分も養父を「ジジイ」か「クソジジイ」としか呼んだ事が無いのを今更思い出しながら、インシオンは書類をテーブルの上に置いて、がりがり頭をかく。

「ガキどもが聞いて面白い話だとは思わねえぞ」

「英雄のお父様のお話ですもの。興味津々で聞いてくれますよ」

エレがくすりと笑み崩れ、夫の隣に腰掛け、翠眼を細めて見上げてくる。インシオンはそれ

でも渋り顔をしながら、やがてぼつりと。

「……俺だ」

苦々しく呟いた。

「え？」

「養父は、俺そっくりだった」

Sample

『アルテアの魔女』続編第一部

死神の継承者と  
西方からの訪問者

## プロローグ 影走る

その街は燃えていた。

暗い空から火の玉が隕石のごとく次々と降り注いで地上が赤く染まる。建物を、人を押し潰し、煌々と燃え上がり、炎は風を呼び、風は更なる炎を吹き上げて、赤と黒ばかりが支配する世界で、全てが炭となつてゆく。

漆黒の空に悠然と舞うは、闇よりなお黒い巨軀。六対の蝙蝠のごとき翼は、思い切り広げれば端から端までが街を覆う。蜥蜴に似た尻尾が揺れ、勢いよく振られれば、黒焦げの建物が砂のようにあつけなく崩れ去つた。

獣の唸り声までそこかしこから聴こえる。地上からむくむくと湧くように、空の支配者の下僕とも思わしき黒い怪物が頭をもたげて立ち上がり、黒煙の中咆哮を放つ。彼らはかろうじて生き延びていた人々に襲いかかり、容赦無く爪で引き裂き、あるいはその鋭い牙で喉笛を食いちぎつて、生者をただの肉塊へと変えてゆく。

阿鼻叫喚の惨劇の中、駆け抜ける小さな影があつた。人だ。正気を保つた人だ。それを認識した瞬間、意識がその人物と重なる。

じりじりと炎が迫り肌を焼く中、その人物は抜き身の透明な刃を持つ剣を手に、崩れていな



い建物の屋根を器用に伝い跳ぶ。時折襲ってくる黒い獣を、見えない軌跡で斬り捨てる。道を共にする者が獣に食われ、あるいは炎にまかれて脱落していつても、影は顧みる事無くまっすぐに、天空の巨体目指して走り続ける。

ひととき大きく跳ねて、空を覆っていた破滅の使者の喉に刃を突き立てる。そのまま腹まで一気に斬り裂けば、赤黒い血がぶわりと噴き出し、雷鳴が轟くより大きな絶叫が聴覚を塞いだ。ぼたぼたと。血が雨のように降ってくる。髪から顔から、全身に返り血を浴びて、口の中にまで苦い鉄錆の味が流れ込んでくる。

恐怖は無かった。代わりに胸を占めるのは、大きな安堵と、狂喜にも似た昂揚感。やっただ。

やっそこいつを殺せた。

黒い粒子と化しながら大地に沈んでゆく巨体を視界に収めながら、血濡れの口元がにやりと満足げな笑みを象った。

# 1 巫女姫と英雄の息子

「——夕、起きなさい、カナタ！」

双子の姉の甲高い声が少年——カナタの耳に突き刺さる。夢の世界からいきなり引きはがされた意識は、まだ身体から離れて頭上のあたりを漂っているかのようににはつきりとしらない。

そんなこちらの事情など知った事かとばかりに、ばん、と大きな音を立てて部屋扉が開かれ、ずかずかと乗り込んで来た姉は容赦無くカーテンと窓を開けて、朝の空気を室内に取り込む。いきなり光が差し込んだまぶしさに呻いてうずくまると、夏掛け毛布もあつという間にはぎ取られた。

「まったく、騎士見習いが一人で起きられなくてどうするの？」

のろのろと視線を上げれば、差し込む朝の光に照らされ、姉の赤銀の髪が輝いて見える。真紅の瞳は呆れ切った様子でこちらを睥睨していた。

フェルム統一王国の王立騎士団員で独身の者は、寮に入るのが、騎士団が設立されてからこつち十数年のならわしになっている。結婚した者、老親の面倒を見なくてはならない者は寮を出て城下に住むが、少年のように結婚しておらず両親も健在なのに実家から城に通う者は、こと珍しい。そこには、少年の生い立ちも多分に含まれているだろう。

「……着替えるから出てけよ、ミライ」

寝癖のついた黒髪を片手でかき回し、翠眼を細めながら、カナタが鬱陶しげに言い放つと、たちまち双子の姉の瞳が真ん丸く見開かれ、それから、明らかに機嫌を損ねた半眼で睨んでくる。

『起こしてくれてありがとう』の一言も無いなんて、ほんっと可愛げ無いわね、あんた」  
むすつと頬を膨らませ、腰に手を当て姉は言い放つ。

「あんたみたいなのが王宮で女子にもてるなんて、その子達にこの姿を見せてやりたいわ」とはいえ、毎度の事と姉も承知しているのだろう。一通りの嫌味を吐き出すと、殊更深い溜息をついて、部屋を出て行った。

扉が閉じられると、カナタはのろのろとベッドを降り、寝間着から紺の騎士服に着替え、姿見の前で身なりを整える。両親の身分を思えば、その息子が情けない姿で登城する訳にはいかない。一番上まで釦をきちんとかけ、裾がまかれていない事を確認する。もともと、基本的に三着を着回している騎士服は、母が每晚丁寧に洗って、皺が寄らないようにじつくりと気を付けて干して、わずかなほつれもすぐに繕ってくれるので、形が崩れる事は無いのだが。

姿見の中の自分を見つめる。光に当たると蒼みを帯びる黒髪に、若草色の瞳。眉は太く、きりつと唇を引き結んだ強気そうな顔が、鏡の中からこちらを見すえている。見慣れた自分の顔

だ。

とどこどこ跳ねた髪を手櫛で梳いて寝癖を直すと、自室を出て階段を降り、ダイニングキッチン食堂兼台所へ顔を出す。すると。

「おはよう、カナタ」

白いエプロンを身につけ、食卓について朝食を摂っている子供達に甲斐甲斐しく茶を注いでいた赤銀髪の女性が、カナタに似た——とはいえ彼女は女性らしい柔らかさを備えている——顔を上げ、花がほころぶような可憐さで微笑んだ。

「……おはよう」カナタは少々無愛想に返す。「母さん」

カナタの母エレは、かつて大陸にあった皇国セアクの姫だ。実際に皇族と血の繋がりがある訳ではないが、巫女姫として崇められていたらしい。もう一つの大国イシヤナと統合して現在のフェルム統一王国が生まれた頃に父と結婚し、ミライとカナタの双子を十九の歳で産んだ。

一般家庭に降嫁してもうすぐ十八年。王家との縁は以前より希薄になっているが、王国軍の将官という敵の多いであろう父の身分と、旧セアク家臣の中にいまだに母を擁して皇国再興を狙っている輩がいるとの事で、弟で現国王のヒョウ・カは常に姉一家の生活に気を配って、城下の憲兵見回りを強化してくれている。

「兄ちゃん、遅い」

「もう父さんは行っちゃったよ、ねぼすけ」

まだ虫の居所が悪いのか視線も向けない姉を後目に、食卓について粗目ざらめのついたパンを頬張りながらこちらに声をかけるのは、妹のトワと弟のスウェンだ。黒髪に赤い瞳を持つトワはカナタよりみつつ年下の十三歳、赤毛に翠眼の末っ子スウェンに至ってはまだ十一歳だが、生意気さはすっかり盛りを迎えている。兄に対しても毒舌なんのその、だ。それもいつもの事なので、カナタが無視してミライの隣席につくと、湯気を立てる紅茶の注がれたカップを、母が目の前にことりと置いた。

「お茶にはミルクを入れる？」

「いいよ」

気遣わしげに小首を傾げてこちらの顔をのぞき込む母から視線を逸らし、そっけない応えを返す。

「パンだけ頂戴」

途端に母が、置いてけぼりをくらった子供のように寂しげな表情をするのが、気配でわかった。

今年三十六のはずの母は、そんな歳になっても若々しく、子供を四人も産んだとは思えない綺麗な身体の線をしていて、顔つきも、言動さえも、二十代前半と言って通用する。

『巫女姫はやはり身も心も凡人とは違うのか』

などとはやし立てる妄信的な人間もいるが、単純に精神年齢が幼いだけだと、カナタは思う。母は意外と抜けているところがあって、父が傍に立ってつかまえておかないと、ある瞬間にふっと迷子になってしまいそうな危うさを帯びている。

実際迷子になったのを見た訳ではないが、子供の頃、一緒に買い物に出掛けたら、大量の食材を買ったのに財布を度忘れして、

『エン・レイ様ならつけにしておきますよ』

と店主に笑顔で言われた。エン・レイとは母の巫女姫時代の名前であると知ったのはその時だ。

とにかく、その後恥をかいたのは父で、代金を持って店に行き、耳まで赤くしながら店主にひたすら頭を下げていたのを、よく覚えていいる。やはり店主は『かまいっこしやしませんて』とのほほんと笑っていたが。

たんぼぼの綿毛のごとくぼやんぼやんした母に対して、父はその地下に逞しく張った根であるかのようにしっかりしている。むしろしすぎていいる。それもそのはずで、父インシオンはイシヤナの英雄なのだ。若い頃にはその戦いぶりの凄絶さから、『黒の死神』の二つ名を戴いていたという。

両親は、昔話をあまり子供達にしない。その代わりとでも言うべきか、周囲の人間達が「エレとインシオンの子供だから」と、きょうだいに話してくれた。

それらの話を統合すると、二人はかつて大陸に現れた怪物、破神タドミールを倒した事があるらしい。破神の血による『神の力』で。

エレは『神の口』による、言葉で人知を超えた力を発揮する『アルテア』の使い手。インシオンはほとんどの傷が回復する『神の血』で半不死身の身体を持っていたという。二人の周囲にも『神の力』を持った人間が何人かいたが、エレがアルテアで破神の呪いと『神の力』を消し去ったのだ。

しかし、自分が産まれる前の過去は正直どうでもいいとカナタは思う。カナタにとってエレは優しい母、インシオンは厳しいながらも家族思いの父。それだけだ。

「ごちそうさま」

「もう行くの？」

パンを茶で流し込み、早々に席を立てば、食器を下げながら母が少女のような無邪気さで訊ねてくる。

「忘れ物は無い？ 気をつけてくださいね」

「わかってるよ、もう子供じゃないんだから」

おろおろしながら玄関まで見送りにくる母の視線がむずがゆく、無愛想に返して、家を出る。母に対して素直に接する事ができない理由。それはある意味カナタのせいである。カナタであってカナタではない、自分の。



当サンプルは、5巻収録分の一部です。  
この先は、本編でお楽しみください。

七月の樹懶 たつみ 暁

URL:<http://july.main.jp/>

Twitter:tatsumisn